

## シンポジウム

### 吉田久一の歴史研究を問う——社会福祉史と近代仏教史の立場から——（趣旨説明）

この度、日本仏教社会福祉学会、社会事業史学会および日本近代仏教史研究会は、共同で「シンポジウム 吉田久一の歴史研究を問う—社会福祉史と近代仏教史の立場から—」を企画いたしました。

このシンポジウムの企画は 2015 年 12 月 13 日に千葉市大巖寺において開催された「吉田久一先生遺著刊行の集い」、すなわち、2015 年 10 月に吉田久一先生の最後の遺著『社会事業小史：社会事業思想の成立と挫折』が勁草書房から刊行されたことを記念してもたれた「集い」を契機としています。この年はまた、吉田先生没後 10 年という記念の年でもありました。

吉田先生は、周知のように、社会事業史と近代仏教史の 2 つの領域の研究に生涯を捧げられた特異な研究者でありました。それぞれの領域で金字塔とも言うべき先駆的な業績を打ち出したことによって、2 つの領域は学術分野として芽生え、根づくことになりました。このことがもつ意味と可能性を考え、語りあう機会をつくりたいと考えました。

吉田先生の研究期間は、大学に入学された 1935 年から 2005 年 90 歳のご逝去までの 70 年間におよびます。この期間は、ちょうど第二次世界大戦の戦争体験および敗戦後の民主化と社会福祉が形成、再編される時期に重なります。それは同時に、講座派マルクス主義を中心とした戦後歴史学が、出発し展開していく時期にもあたります。

このシンポジウムでは、吉田先生の歴史研究に、日本仏教社会福祉学会、社会事業史学会、日本近代仏教史研究会の 3 つの学界の研究者が各々の立場から光をあて、その時代的背景とともに、吉田史学が蒔いた研究の学術的成果を検証しつつ、次の 2 点を焦点として討論を深めたいと存じます。

1. 今日の研究者は、吉田史学とのあいだで、どのような対話が可能であるのか。現代の学問状況に照らして、吉田史学から何を学び、どのように吉田史学を評価し、位置づけたらよいのか。
2. 社会福祉史と近代仏教史の研究者のあいだで、どのような対話が可能なのか。人文社会科学のどの領域でも専門化と緻密化が進行し、分野をこえた議論がなかなか難しくなっている状況がある。異分野の研究者との対話が、ますます求められつつある。

吉田史学をめぐる 2 つのタテとヨコの対話が、現在の人文社会科学が置かれている状況を反省し、今後の学術のありかたを示唆することを期待したい。学術上の領域を越えた、はじめての試みに、多くのみなさまがご参集くださり、議論の輪のなかに参加していただくことをお願いするしだいです。

日本仏教社会福祉学会・社会事業史学会・日本近代仏教史研究会共催）